

# 病

正岡子規

青空文庫



○明治廿八年五月大連灣より帰りの船の中で、何だか勞つかれたようであつたから下等室で寝て居たらば、鱯ふかが居る、早く来いと我名を呼ぶ者があるので、はね起きて急ぎ甲板へ上つた。甲板に上り著くと同時に痰たんが出たから船端の水の流れて居る処へ何心なく吐くと痰ではなかつた、血であつた。それに驚いて、鱯を一目見るや否や梯子はしごを下りて来て、自分の行李こつりから用意の薬を取り出し、それを袋のまままで着て居る外套がいとうのカクシへ押し込んで、そうして自分の座に帰つて静かに寝て居た。自分の座というのは自分が足を伸ばして寝るだけの広さで、同業の新聞記者が十一人頭を並べて居る。自分らの頭の上は仮の棧敷さじきで、そこには大尉以下の人

が二、三十人、いつも大声で戦いくさの話か何かして居る。その棧敷と  
いうのは固より低いもので、下に居る自分らがようよう坐れる位  
のものだから、呼吸器の病に罹かかつて居る自分は非常に陰気に窮屈  
に感ぜられる。血を咯はく事よりもこの天井の低い事が一番いやで  
あつた。この船には医者は一人居たがコレラの薬の外に薬はない  
そうだ。固より病人の手あてなどしてくれる船ではないから、時  
々カクシの薬を引き出しては独り呑んで見るけれど、血はやはり  
とまらぬ。もつとも着物は洋服一枚着たきりで日本服などはない、  
外がいとう套も引っかけたままで寝て居るのである。航海中の無聊ぶりようは  
誰も知つて居るが、自分のは無聊に心配が加わつて居るので、た  
だ早く日本へ着けば善いと思ふばかりで、永き夜の暮し方に困つ

た。時々上の棧敷で茶をこぼす、それが板の隙間すきまから漏りもて下に寝て居る人の頭の辺へポチポチと落ちて来る、下の人が大きな声で、何かこぼれますよ、と怒ったようにいう、上の人が、アアそうですか失敬失敬、などという。こんな問答でもあるとその間だけ気が紛まぎれて居るが、そんな事も度々はない。退屈の余り凱旋がいせんの七絶が出来たので、上の棧敷の板裏へ書きつけて見たが、手はだるし、胸は苦しし遂に結句だけ書かずにしまった。その内にも船はとまって居るのでもないからその次の日であったかまた次の日であったのか午前に日本の見えるという処まで来た。日本が見える、青い山が見える。という喜ばしげな声は処々で人々の口より聞えた。寝て居る自分もこの声を聞いて思わずほほ笑んだ。午

後には馬関にはいった。この時室内を見まわして見ると、五、六  
十人も居る広い室内に残つて居る者は自分一人であつた。自分も  
非常に嬉しかったから、そろそろと甲板へ出た。甲板は人だらけ  
だ。前には九州の青い山が手の届くほど近くにある。その山の緑  
が美しいと来たら、今まで元はげやま山ばかり見て居た目には、日本  
の山は緑ろくしやう青で塗つたのかと思われた。ここで検疫があるので  
この夜は碇泊した。その夜の話は皆上陸後の希望ばかりで、長く  
戦地に居た人は、早く日本の肴さかなが喰いたい、早く日本の蒲団に寝  
たい、などといつて居る。早く妻君の顔が見たいと思つて居るの  
も二人や三人はあるらしい。翌日は彦ひこしま島へ上つて風呂にはいっ  
た。着物も消毒してもらつた。この日は快晴であつたが、山の色

は奇麗なり、始めて白い砂の上を歩行あるいたので、自分は病氣の事を忘れるほど愉快であった。愉快だ愉快だと、いわぬ者は一人もない。中にはこのきたない船にコレラのなかつたのは不思議だ、などというて喜んで居る者もある。しかしこの喜びと愉快が三時間とは続かなんだ。三、四艘の舢はしけは我々を載せて前後して本船に帰つてから、まだ幾分時もたたぬに、何やら船中に事が起つたらしい。甲板を走る靴の音は忙しくなつて、人々の言い罵ののる声が聞える。あるいは誰かが誤つて海中へ落ち込んだでもあろうか、など想像して居る中に、甲板から下りて来た人が、驚くべき報知を持ち来した。それは、この船に乗つて居た軍夫が只今コレラで死んだ、という事であつた。これを聞くと自分の胸は非常な動悸どうきを

打ち始めて容易に静まらぬ。周囲は忽ちコレラの話となつてしも  
うた。ただこの後の処分がどうであろうという心配が皆を悩まし  
て居る内に一週間停船の命令は下つた。再び鼎かなえの沸くが如くに騒  
ぎ出した。終に記者と士官とが相談して二、三人ずつの総代を出  
して船長を責める事になつた。自分も気が気でないので寐ても居  
られぬから弥次馬やしうまでついて往た。船長と事務長とをさんざん窮迫  
したけれど既往の事は仕方がない。何でも人夫どもに水を飲ませ  
るのが悪いというので、水瓶の処へ番兵を立てる事になつた。自  
分は足がガクガクするように感ぜられて、室に帰つて寐ると、や  
がて足は氷の如く冷えてしもうた。これは先刻風呂に這入つた反  
動が来たのであるけれど、時機が時機であるから、もしやコレラ

が伝染したのであるまいかという心配は非常であつた。この梅干船（この船は賄まかないが悪いのでこの仇名あだなを得て居た）が我最期の場所かと思ふと恐しく悲しくなつて一分間も心の静まるという事はない。しかし郵便を出してくれると聞いて、自分も起き直つて、ようよう硯すずりなど取り出し、東京へやる電報を手紙の中へ封じてある人に頼んでやつた。こういう際には電報をやるだけでもいくらかの心やりになるものだ。この夜また検疫官が来て、下痢症のものは悉ことごとく上陸させるといふので同行者中にも一人上つた者があつた。自分も上陸したくてたまらるので同行の人が周旋してくれたが検疫官はどうしても許さぬ。自分の病気の軽くない事は認めて居るが下痢症でない者を上陸させろという命令がないから仕方がない

という事であつた。如何にも不親切な、臨機の処置を知らぬ檢疫官だと思つて少しは恨んで見た。しかし今は平和の時でないのだから余り卑怯ひきような事はいうまい位の覚悟は初めからして居る。そう思つて自分はいきりあきらめた。けれどもつくづくと考へて見るとまた思い乱れてくる。平生の志の百分の一も仕遂しとげる事が出来ずに空しく壇だんの浦うらのほとりに水葬せられて平家蟹へいけがにの餌食えじきとなるのだと思つと如何にも残念でたまらぬ。この夜から略かつ血けつの度は一層烈はげくなつた。固より船中の事で血を吐き出す器もないから出るだけの血はことごと尽く吞み込んでしまわねばならぬ。これもいやな思ひの一つであつた。夜が明けても船の中は甚だ静かで人の気は一般に沈んで居る。時々アアアという歎声を漏もらす人もある。一週間

の碇泊とは随分長い感じがする。甲板から帰って来た人が、大山大将を載せた船は今宇品うしなへ向けて出帆した、と告げた時は誰も皆妬ねたましく感じたらしい。この船は我船より後おくれて馬関へはいつたのである。殊に第二軍司令部附であつた記者は、大山大将が一処に帰るといわれたのを聴かずに先へ帰つて来て実にいまましい訳だ、と悔くやんで居た。乗合一同皆思案にくれて居る中、午後四時頃になつて一道の光明は忽たちまち暗中に輝いて見えた。それは、上陸の許否は分らぬがとにかく、和田の岬の検疫所へ行く事を許されたという事であつた。上陸せんまでも、泊つて居るよりは動いて居る方が善いというのは船中の輿論よろんである。船は日の暮に出帆した。非常にのろい速力でゆつくりと行たので翌日の午後ようやに漸く和

田の岬へ著いた。上陸が出来るか出来んかと皆固唾かたずを呑んで待つて居たがこの日は上陸が出来ずに暮れてしもうた。翌日の十時頃に上陸の事にきまつたので一同は愁眉しゆうびを開いた。殊に荷物を皆持つて上れという命令があつたので多分放免になるのであると勇みに勇んで上陸した。湯に入つて（自分は拭ふいただけで）折詰の御馳走を喰うて、珍しく畳の上に寐て待つて居ると午後三時頃に万歳万歳、という声が家を揺ゆるかして響いた。これは放免になつた歓びの叫びであつた。この時の嬉しさは到底いう事も出来ぬ。自分は人力車で神戸の病院へ行くつもりであつたから、肩には革か包ばんをかけ、右の手にはかなり重い行李こくりを提げ、左の手は刀を杖について、喘あえぎ喘あえぎそろそろと歩行あいて見たが、歩行あくたびに血を

略くので、砂の上へ行李を卸して腰かけて休んで居た。声を揚げて人を呼ぶ気力も最うない。折よく連の人が来たので、自分の容態を話し、とても人力には乗れぬから釣台を周旋してくれまいかと頼んだ。その人は快く承諾して、他の連と相談した上で一人を介抱のために残して置いて出て往た。このさいに自分が同行者の親切なる介抱と周旋とを受けた事は深く肝に銘じて忘れぬ。二時間ばかり待つてようよう釣台が来てそれに載せられて検疫所を出た。釣台には油単が掛つて居て何も見えぬけれども人の騒ぐ音で町へ這入つた事は分る。殊に往来の多いのと太鼓などの鳴つて居るので考えると土地の祭礼であるという事も分つた。上陸した嬉しさと歩行く事も出来ぬ悲しさで今まで煩悶して居た

頭脳は、祭礼の中を釣台で通るといふコントラストに逢うてまた一層煩悶の度を高めた。丁度灯ひともし頃神戸病院へ著いた。入院の手續は連の人が既にしてくれたので直に二階のある一室へ這入った。二等室というので余り広くはないが白壁は奇麗きれいで天井は二間ほどの高さもある。三尺ばかりの高さほかない船室に寐て居た身はここへ来て非常の愉快を感じた。殊に既往一ヶ月余り、地べたの上へ黍むぎ稗わらを敷いて寐たり、石の上、板の上へ毛布一枚で寐たりという境涯であつた者が、俄にわかに、蒲団や藁蒲団の二、三枚も重ねた寐台の上に寐た時は、まるで極楽へ来たような心持で、これなら死んでも善いと思つた。しかし入院後一日一日と病は募つりて後には咯血むに咽むせるほどになつてからはまた死にたくないの

いよいよ心細くなつて来た。やがて虚子が京都から来る、叔父が国から来る、危篤きとくの電報に接して母と碧梧桐へきごとうとが東京から来る、という騒さわぎになつた。これが自分の病気のそもそもの発端である。

〔『ホトトギス』第三卷第三号 明治32・12・10〕



# 青空文庫情報

底本：「飯待つ間」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年3月18日第1刷発行

2001（平成13）年11月7日第10刷発行

底本の親本：「子規全集 第十二卷」講談社

1975（昭和50）年10月刊

初出：「ホトトギス 第三卷第三号」

1899（明治32）年12月10日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※底本では、表題の下に「子規」と記載されています。

入力：ゆうき

校正：noriko saito

2010年8月4日作成

2011年5月16日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

# 病

正岡子規

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>